

「私たちの時間がこもった大切なお米」



10月2日と3日は稲刈りでした。

1日目のコシヒカリ。日差しが強く、暑い日。さらに初めての稲刈り。夢中で刈り始めたものの、うまく進みません。次第に子どもは意気消沈していきました。何とか終えたのが12時。クラスの雰囲気は沈みました。「明日は、今日の反省を生かして、分業にして、役割分担をしたり、稲を置かずに手渡ししたりして、楽しくやりたい」という決意で迎えた2日目。子どもの動きは、分業などの工夫が生きて、稲刈りになっていました。刈る人、運ぶ人、そろえる人、結ぶ人。稲は手渡し。刈るペースが速いときは、運ぶ人が連絡役になる。それぞれすべきことが、グループごとにはっきりしていました。あっという間に稲刈りは終わりました。

刈った稲を干しておいたのですが、台風の前に機械で脱穀をするか、手でやるために校舎内に避難させるかを話し合いました。「手でやる」ことに意味があると考えた子どもたちは、すべての稲を校舎内に運び込みました。そして「手」での脱穀が始まりました。最初は牛乳パックでの脱穀。丁寧にひとつひとつ外していくのですが、時間がかかります。足踏み脱穀機の存在を知り、それを借り受けて脱穀することにしました。今までよりも効率がよい。でも、粃が飛び散ったり、一粒ずつにならなくて、手で確認をしたりと、手間がかかります。とりきれない粃はロスになりました。コシヒカリは愛踏み、風さやかはハーベスタという計画で始めたので、風さやかはハーベスタでやればロスが減ると考えていた子どもたち。でも足踏みで協力して脱穀する楽しさを知った子どもたちは、「風さやかも足踏みでやりたい」とも考えるようになりました。どちらの方法をとるかの話し合いが続きました。「私たちの手でやってきた一つ一つの時間がこもったお米だから、そういうお米を育てた時間を捨てるみたいで、いやだから。ただのお米を捨てているのじゃなくて、みんなの手で育てた、みんなの時間がこもったお米を捨てることがもったいないから」ということが、方法は違っても、私たちみんなの根っこにある共通した思いだと確認し合う話し合いともなりました。多数決ではなく、納得してハーベスタという結論を出しました。



収穫したお米は、炊き方の研究をくり返すことで、納得のいく味にさせていただくことができました。わらは、しめ縄にして持ち帰りました。まだまだこれからも、収穫したお米やわらを大切にして活動していきます。